



早稲田大学  
理工学研究科工業経営学研究 石井 和克

**高品質・低価格住宅** 近年、多くの製造業が直面している問題の1つに、「多様化、特殊化する需要に対して、いかに生産効率の高いシステムを設計していくか？」があります。

その代表的な産業として、プレハブ住宅産業があります。

プレハブ住宅産業では、顧客の家族構成、宅地条件、趣味・趣好により多様化する要求に対して、低コスト、高品質、納期厳守でこたえていかなければなりません。

一方、住宅生産においてプレハブ生産技術が導入されてから、かなりの年月が経過しています。その間、導入目的のうち、高品質、多量供給という面では、いろいろの改善が行なわれました。しかし、コスト低減に関する改善は、各企業の努力にもかかわらず、まだ、それほどの実を上げているとは、思われません。

現在、住宅建設戸数の十数パーセントがプレハブ住宅だといわれていますが、この数字は今後さらに増加すると推測されます。

したがって、今日、社会問題にさえなっている、高品質・低価格住宅の安定供給という問題を、私なりに考えていきたいと思えます。

会員諸氏のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

電力中央研究所情報処理研究所  
システム開発研究室 鈴木 道夫

**10年めの節を求めて** 電気事業の研究機関で、情報処理に関する諸問題のいくつかに身を投じてちょうど10年め

になる。10年ひと昔とよくいうが、この間、「10年めには自分なりのひとつの節をつくりたい」とたえず考えながらも、経ってしまえばそれらしきものは何も築けなかったようである。思うに、節となるべき目標を具体的にしていなかったことがひとつの原因か。

ところで、「会員近況」というタイトルの趣旨に沿うことになるかどうかかわからないが、これまで私がやってきたことに対して、昨今感ずるところを恥を忍んで述べてみたい。私のあつかっている問題を一口にいえば、企業で情報処理業務にたずさわる人々が抱えている問題を解決することである。したがって、情報処理システムの設計・製作・運用、企業内ユーザー部門とのコミュニケーション、標準化や組織体制など、あつかう問題の領域はきわめて多岐にわたり、またその限界というものが無い。

こうした問題に対するこれまでのアプローチでは、いわば特定の問題をひとつひとつ取り上げてはその解決をはかってきたといってよい。そうした個別の経験の積み重ねによって、問題領域全体の姿がおぼろげながらつかめてきた（それは点のいくつかを知って集合全体を推論するようなものである）のと同時に、そのような個別のアプローチの限界を感ずるようになった。10年間の経験が教えてくれたものは、そのアプローチの一定の効果とその限界性の認識だったのである。

この限界をどう乗り越えるか、それがこれからの課題である。この課題に挑んで新しい有効なアプローチを見出し、再び新たな限界にぶつかるとき、それはまたつぎの10年後かもしれない。しかしその時に今日を振り返れば、そこにひとつの節がつくられていることに気づくのではないだろうか。

神戸商科大学  
経済研究所 河崎 俊二

「公共的意思決定過程」に取り組む わが研究所には、「地域科学」と「システム科学」の2講座があり、6人の研究員が所属している。共同研究がたて前となっており、ここ数年来、2講座共同で地方行政を対象とした「公共的意思決定過程」の研究を行なってきた。

公共的な問題に関する意思決定を中心に、地域社会という組織の生理的構造を解明することによって公共問題に関連する病理現象の原因究明と治療法の確立をはかる

のが目的である。「公共的意思決定」の概念規定さえまだ確立されていない未開拓の分野であり、研究の第一段階で用語の定義を行なう必要があったが、6人の専攻や経験のちがいがあって、はじめから理論的な共同研究を本格的に行なうことには無理があった。そこで、文献による研究とあわせて、たとえば総合計画策定支援システムの開発のようなきわめて現実的な問題と取り組むとともに、県や市の職員との共同研究会を定期的で開催するなど、共通の経験を積み重ねていく努力をしてきた。

今年度は、これらの成果をふまえて、いよいよ理論的研究に必要な基本的概念の整理を行なう計画である。成否は、研究員の専攻のちがいをうまく生かすことができるかどうかにかかっている。そして、私にとっては、この1年は、大学奉職前の地方行政9年の経験が生きるかどうかの正念場ということになる。

神戸商科大学  
商経学部管理科学科 藤田 修一

**もっとOR学科(?)のPR** 現在神戸商科大学管理科学科4回生。社会システムにいちばん興味もっています。もちろん研究というようなものはなく、興味とどまっています。タオル産業の計量分析を卒業論文のテーマにただいま取り組んでいます。

神戸商科大学の管理科学科を選んだのは、コンピュータのソフトウェアに興味があり、その周辺の学問とともに経済学等も学べるようだったからです。しかし正直いってORについては何も知りませんでした。そして入学してから管理科学、管理工学、経営工学等のさまざまな名前で、学校によって内容もさまざまであることを知りました。いまから考えればこの学科を選んで入学できたのはラッキーでした。それほどこういう学科に関する情報もっていませんでした。5月号で木下雄三氏がかかっているように、企業がこういう学科の出身者をコンピュータ室へ閉じこめてしまうということも、こういう学科が一般に知られていないことを如実に示す事実でしょう。

マネジメント・サイエンスという学問が発生してからまだ日が浅く、一般に広く理解されるまでまだ長い時間かかるのはしかたのないことかもしれません。しかし、その時間を少しでも短くするために、もっと積極的なPRの必要があるのではないのでしょうか。

日立製作所  
システム開発研究所 佐々木浩二

**ニーズの把握と適用効果の評価** 社内のいくつかの利益部門のために経営計画支援システムの研究開発に取り組んでいます。この種のシステムの開発導入では、つぎのような点が問題となっています。ユーザーが経営幹部であるため具体的なニーズの把握が困難なこと。これとも関連し、経営効果の定量化がむずかしいこと。

前者については、KJ法や目的樹木法で整理したうえで、実データを用いて実験的シミュレーションを行ないこれに対する経営幹部の具体的反応を引き出し、実用モデルへと改訂していくという方法で臨んでいます。効率化のために経営シミュレーションのための汎用システム(MPSS)を用意していますが、これには、シミュレーション結果をフィードバックして政策変数値を自動修正して経営目標を満たす計画案を作成する機能があります。これについて、TIMS XXIIIで発表するため7月末にアテネにゆく予定です。

後者については、経営計画スタッフの省力化といった周辺の効果ではなく、経営の本質面への効果を数量として把握することが問題で、有効な方法がありません。効果の測定評価についてよい考えがあれば、ご教示ください。

新潟大学  
理学部数学科 田中 謙輔

**5年目を迎えた情報数学講座** 当大学理学部数学科に新しく情報数学講座が昭和48年度に増設され、それまで純粋数学講座のみの状況からはじめて応用数学系の講座が生まれました。当初はなかなか応用数学を理解してくれる研究者が少なく困りましたが、幸い九大理学部の情報数学関係の方々や、東工大理学部情報科学科の方々のご協力によりまして学生の中からだんだん興味をもつものも多くなってきております。今年度も東工大の鈴木光男先生からゲーム理論の特別講義をしていただきました。

現在当講座の大学院修士課程では3人、研究生として1人おりますが応用数学系がこの講座のみの関係と私の興味などから計画数学と統計数学を中心に広く教育しております。このような環境から若い研究者も徐々に育っておりますので今後とも研究や教育の面で皆様方の幅広いご協力をお願いいたします。